

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>2003年の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、長満たき、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://iwasakijunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakijunichi.net/waka/				
詠進年月日	題	2003年の歌会・歌合(全て自歌会・自歌合)	通釈	語釈	他歌人欄	
主催: 岩崎純一	歌数:2首 歌人数:1名 自歌数:2首	『駒場野和歌』(こまばのわか)			評	派生歌など
2003	母校である東京大学駒場構内近くの駒場野公園近辺を詠んだ歌である。 自撰					
2003/1/23	駒場野	駒場野の我がうつせみに雨落ちて冬の寒さにたぐふ夕暮れ	現に駒場野にあるこの我が身に雨が落ちて、冬の寒さらしい夕暮れである。			
2003/2/6	駒場野	まぼろしの夜の頂の中空に駒場野高き明星(あかぼし)の影	駒場野にて、幻のような夜の天空を見上げると、明けの明星の姿があるのだった。			
主催: 岩崎純一	歌数:2首 歌人数:1名 自歌数:2首	『石神井川桜柳歌』(しやくじゐがはさくらやなぎうた)			評	派生歌など
2003	石神井川の桜と柳を詠んだ歌である。 自撰					
2003/4/8	石神井川桜	我が心昔にむかふ涙川桜の折の水面(みなも)ならでは	私の心は、昔の石神井川の素晴らしい姿を思い出しては幻のうちに対面し、私の涙まで川のようにだ。少なくとも、水面(みなも)に桜が散り、昔の姿に似る季節以外は。	◇慣用「涙川」		
2003/6/3	石神井川柳	水の色しだれ柳をうつすため夏の限りの風よ吹き敷け	水の色に両岸の青きしだれ柳を映すため、夏に起こり得る限りの風よ、吹き渡って柳の葉を乱せよ。	◇参照「夏山の河上きよき水の色のひとつにあをき野辺の道芝」(定家)		